# 棕櫚の主日礼拝説教「何を捜しているのか？」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年3月24日

## 【棕櫚の行進・旧約聖書】ゼカリヤ書　9章9～10節

9 娘シオンよ、大いに踊れ。
　娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
　見よ、あなたの王が来る。
　彼は神に従い、勝利を与えられた者
　高ぶることなく、ろばに乗って来る
　雌ろばの子であるろばに乗って。
10 わたしはエフライムから戦車を
　エルサレムから軍馬を絶つ。
　戦いの弓は絶たれ
　諸国の民に平和が告げられる。
　彼の支配は海から海へ
　大河から地の果てにまで及ぶ。

## 【棕櫚の行進・福音書】ヨハネによる福音書　12章12～16節

12その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると
聞き、13なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。
　「ホサナ。
　主の名によって来られる方に、祝福があるように、
　イスラエルの王に。」
14イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおり
である。
15 「シオンの娘よ、恐れるな。
　見よ、お前の王がおいでになる、
　ろばの子に乗って。」
16弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられた
とき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスに
したということを思い出した。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書　18章1～18節

1こう話し終えると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロンの谷の向こうへ出
て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。2イエ
スを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと
共に度々ここに集まっておられたからである。3それでユダは、一隊の兵士と、
祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやっ
て来た。松明やともし火や武器を手にしていた。4イエスは御自分の身に起こる
ことを何もかも知っておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。
5彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われ
た。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。6イエスが「わたし
である」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。7そこで、イエス
が「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエス
だ」と言った。8すると、イエスは言われた。「『わたしである』と言ったでは

ないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」[9]それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。[10]シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした。手下の名はマルコスであった。[11]イエスはペトロに言われた。「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」

[12]そこで一隊の兵士と千人隊長、およびユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、[13]まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアファのしゅうとだったからである。[14]一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアファであった。

[15]シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに従った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ったが、[16]ペトロは門の外に立っていた。大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた。[17]門番の女中はペトロに言った。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。[18]僕や下役たちは、寒かったので炭火をおこし、そこに立って火にあたっていた。ペトロも彼らと一緒に立って、火にあたっていた。

## ろばの子に乗って【こども説教のために】

今日、「棕櫚の主日」から、教会が特別に大切にしている一週間、「受難週」が始まります。主イエスが最後、エルサレムの町にお入りになり、そこで十字架につけられて死に、墓に葬られたことを記念するのです。

主イエスは、「**ろばの子に乗って**」エルサレムの町に入られました。子ろばですから、まだ荷物を運ぶことも、人を乗せたこともなかったことでしょう。頼りなさそうな子ろばに乗ってエルサレムの町に入られた主イエスを、大勢の人がなつめやし（シュロ）の枝を持って出迎えました。「ホサナ」、「イスラエルの王」と言って、歓迎したのです。

けれども、それから数日後、主イエスは、兵士たちに捕らえら、縛られて、連れて行かれ、ユダヤ総督ピラトの裁判にかけられていました。主イエスを訴えた人々がいたのです、「この男は悪いことをした」と。ピラトは、「あの男に何の罪も見いだせない」と言って、主イエスを釈放しようとしました。けれども、人々は、「釈放するのはバラバだ」と訴えました。バラバは強盗で捕まった犯罪者です。人々の訴えを、ピラトは聞かないわけにはいきませんでした。主イエスは十字架につけられて死刑にされることになったのです。

主イエスの弟子たちは、この出来事を見て、信じるようになったのです、主イエスが「平和」をお告げくださるために子ろばに乗ってエルサレムに入られたのだということを。主イエスが苦しまれたのは、人の罪のためだということを。わたしたちの過ちのために、主イエスは懲らしめを受けられたのだということを。このお方によって、わたしたちが癒されたということを。

**「父がお与えになった杯」**

前任地教会時代、教区の行事「こどもフェスティバル」で「受難劇」を演じたことがありました。東日本大震災から二年後の受難節の最初の日曜日の午後、教区内の諸教会から 200 人ほどの子どもと大人が集まり、参加者全員が役を割り当てられ、皆が役者と観客を兼ねたのです。皆、素人役者でしたが、一人だけプロの役者が参加していました。正確には、プロの役者が一匹です。動物プロダクションに所属するロバです。実働 10 分ほどでしたが、出演料を 30 万円ほど支払いました。教区の行事予算では賄えない金額でしたが、企画を担当した牧師たちが「ろばプロジェクト」と称して教区中の牧師たちに募金を募り、実現しました。本物のロバに出演してもらうことで、子どもたちの心に受難劇を印象付けたい、という牧師たちの熱意の結果でした。

10 年に一度、村人総出で演じられるドイツ・オーバーアマガウ村の「受難劇」は、5 カ月の間に 100 回以上、上演され、40 万人以上の観光客が観劇することで知られています。17 世紀初め、ヨーロッパでペストが大流行する中、「流行が収まったら、感謝のしるしとして 10 年に一度、上演する」と村人たちが誓ったことから始まったと言われています。なぜ「受難劇」だったのか、と思うかもしれませんが、彼らにしてみれば当然のことだったのでしょう。

弟子たちと共にいるところを逮捕されたとき、弟子のペトロは、大祭司の手下に剣で打ってかかりましたが、主イエスは彼を止めて言われたのです、「**父がお与えになった杯は飲むべきではないか**」と。逮捕される前、主イエスは、祈られていたのです、「**父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください**」（ルカ 22:42）と。今や、御心ならば、この杯を飲もうと、主イエスはペトロにおっしゃるのです。剣をさやに納めさせて、主イエスは、自らを捕えに来た人々の前に進み出られました。縛られて、連れて行かれることを、良しとされたのです。

すべては、お分かりになられていたのです。**ご自分の身に起こることを何もかも知っておられて、進み出**られたのです。

「**だれを捜しているのか**」。それが、主イエスから問いかけられた言葉です。もちろん、「**ナザレのイエス**」を捜しに来ているのです。兵士たちまで動員して。それは、いかなる者か。

捕らえられ、縛られ、連れて行かれ、鞭打たれ、そして十字架につけられいくお方。主イエスは、人々の手から手へと渡されて行きました。ロバに載せられた荷物のように、自分の意志ではなく、人々の思いに身を委ねられたのです。それが、「父がお与えになった杯」なのです。それが、「御心」なのです。

**「わたしである」**

この主イエスのお姿を見るために、わたしたちは、受難週の物語を聞こうとしているのです。瞼に焼き付けようとしているのです。

主イエスは、そこにいらっしゃいます。捜している者たちの目の前にいて、「わたしである」と自ら名乗られます。その方は、手を伸ばせば触れることのできるところにいらっしゃるのです。ご自身で進み出られ、「わたしだ」とおっしゃられるのです。

けれども、捕えに来た者たちは、後ずさりしました。地に倒れ込んでしまいました。捜しているはずの者が目の前にいて、彼らは何をしているのでしょうか。手を伸ばして捕えればよいのです。縛って、連れて行けばよいのです。ところが、そうすることができませんでした。できないのです。主イエスが目の前にいて、「わたしだ」とおっしゃられても、手を出せません。捜していたはずなのに、捕えられません。

彼らがようやく主イエスに手を伸ばして捕えたのは、ペトロが剣で打ちかかってからでした。ペトロの姿を見て、彼らはようやく、「この者が、自分たちの捜していた者だ」と我に返ったのかもしれません。

「**だれを捜しているのか**」。教会へと招かれて来ているわたしたちも、ここで捜しているのです。主イエスを捜しているのです。自分の救い主を、探しているのです。けれども、ときに、分からなくなるのです。だれを捜しているのか。捜している主イエスが、どこにいらっしゃるのか。どのようなお方なのか。「わたしだ」と主イエスが近づいて来てくださっても、後ずさりしてしまうのです。「わたしが捜していた主イエスは、こんなお方だっただろうか」と。期待していた姿との違いに驚き、倒れ込んでしまうのです。

それでも、このお方が、主イエスなのです。ロバに載せられた荷物のように、ご自分の身を人の手に委ねられたお方。人々の手に渡され、次から次へと引き回され、さらし者にされるお方。弟子たちだけではなく、武器を手にして近づいてくる者にも、権威をもって語りかけてくる者にも、畏れをもって問いかけてくる者にも、「十字架につけろ」と訴えかけてくる者にも、このお方は、ご自分の身を委ねられるのです。

このお方を、世界は探し求めているのです。このお方を探し求めるように、天の父は御心にお決めになられ、杯をお与えになられたのです。

「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」そうです。たとえ「違う」と答えても、わたしたちは、あのお方の弟子です。あのお方によって、あのお方のもとから去らせられた弟子の一人です。あのお方は、わたしたちを、去らせられるのです。それは、わたしたちも、あのお方のようになるためです。世界が探し求めるお方と同じ姿にされるためなのです。